

松任谷 正隆の

僕のひとりごと

29

VOL.29 お菓子の家

76年に結婚をし、練馬区関町で生まれて初めてのマンション暮らしを1年半ほど経験した後、

ようやく一軒家に引っ越したところまで書いて、ずいぶん脱線してしまった。

ここからはその一軒家の続きである。

一軒家は世田谷区松原の住宅街、細い一方通行の坂道の途中にあり、

ちょっとだけお菓子の家のような可愛さがあった。

はっきりは覚えていないが、木造の壁の白と屋根の赤色のせいだろう。

築何年の物件だったのか・・・20年以上は経っていたと想像する。契約を決めてきたのはかみさんだ。

たぶん友達関係から見つけてもらったのだと思う。敷地は30坪くらいで家賃は24万だったか。

それまでのマンションが13万だったので異常に高いな、とも思ったが、

マンションの居心地悪さを考えれば、もうこれは仕方がないことだと諦めた。

何よりこの物件にはガレージがついているのがよかった。

ガレージは坂道に面していて、少しだけ勾配がついていた。

だからクルマを停めると頭が斜め上を向いた。

なぜかもぐらたたきを連想した。

鉄製の小さな門扉がガレージの横にあり、

そこから階段で半階ぶんくらい上がったところに玄関があった。

ガレージの真上は居間に面したテラス。人工芝が張ってあった。

家の両側、向かいはいびつりと家が立ち並び、

ちょっと息苦しい感じもしないでもなかったが、

でもまあ、あのマンションに比べれば100万倍でした。



間取りを説明しよう。

まず玄関を入ると右側がリビングとダイニングキッチンがひとつになったような空間。

15 畳はなかったと思うが、ここがこの家で一番広い部屋だった。左側は6畳くらいのこじんまりとした部屋。

ここに僕たちはアップライトピアノを置いて、基本的にはかみさんの作曲部屋ということにした。

その部屋の奥にはいわゆる洗面所と風呂場、トイレが別々にあった。

この別々感がちょっと古い家な雰囲気を醸し出していた。

はて、階段はどこにあったのだろう。廊下のどこかにあったはず。

2 階に上がると、右側が10畳程度のリビング、左側が用途のわからない小さめの部屋……

ひょっとして元は子供部屋だったのかもしれない……それと正面に8畳くらいのベッドルームがあった。

2 階のリビングは僕のステレオ、いや僕たちのリスニングルームになった。

引っ越した当時、違和感はたぶんあったのだと思うが、じきに慣れた。

かみさんはリビングが狭くなるから、と、家具を置かず、大きなクッションだけを置いた。

誰かが来ると、まるで体育の時間みたいに、そのクッションの上で体育座りをして話し込んだ。

床がグリーンぽい妙な柄のビニールタイルだったのを覚えている。

テラス側の隅にはブラウン管式のテレビとビデオ。フォーマットはVcode2 というやつで、

もう誰も知らないような形だ。これからはVHSになるかβになるか、

なんて論争になるちょっと前だったのだろう。

この後79年に初めての家を建てることになるから、

この家もそんなに長くは暮らしてなかったはずなのに、

今思い出しても5年以上には感じるから、

濃密な時間が流れたということなのかもしれない。

確かに現在につながる様々な大事な事柄が

この時期に生まれたと思う。

次回からはそんな話を書いてみようか……。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。